様式 D

論文審査の結果の要旨

学位記番号	※　甲第 59 号

氏　　名　　松本 明日香

論　文　題　目　　専攻学問に対する価値と学士課程における学習成果との関連

論文審査担当者

主 査　　小川 一美（心理学部教授）

副 査　　斎藤 和志（心理学部教授）

副 査　　丹藤 克也（心理学部教授）

副 査　　松浦 均　（星槎大学大学院教育学研究科教授）

様式 Ｄ－２

論文審査の結果の要旨

1. 論文の概要

本論文は，専攻学問に対する価値という概念に着目し，学士課程における学習成果にもたらす影響や，学士課程の中での変化の様相を検討したものである。専攻学問に対する価値とは，学士課程の中で専門的に学ぶ学問分野に対して，学習者がどのような価値を求めるのか，どのような魅力や意義があると認識しているのかといった，自身の専攻学問に対する個人的な意味づけのことである。

序章となる第 1 章では，専攻学問に対する価値という新たな概念や，学士課程における学習成果などについて整理した上で，専攻学問に対する価値と学士課程における学習成果の関連を検討する意義を説明した。その上で，第 2 章から第 4 章で取りあげている要因間の関係を図示し，本論文の構成を解説した。

第 2 章では，研究 1 として 900 名の大学生を対象としたデータに基づき，専攻学問に対する価値を測定する尺度の検討を行い，研究 2 として専攻学問に対する価値と，学習に関する学習成果の 1 つである批判的思考との関連を，調査と課題遂行型テストに基づき検討した。まず，専攻学問に対する価値には，先行研究で検討されてきた他の課題価値と同様，興味価値，利用価値，私的獲得価値，公的獲得価値という 4 つの下位側面があることが明らかにされた。そして，専攻する学問に対し価値を見いだした上で学ぶことは，学習成果の 1 つとされている批判的思考力を身につけるための重要な要素であることが示された。

第 3 章では，研究 3 と研究 4 として，専攻学問に対する価値と，学士課程で獲得することが求められている学習成果の学習以外の側面であるキャリア意識および大学生活充実度との関連を，調査データに基づき検討した。専攻学問に対する興味価値，利用価値，私的獲得価値が高いと，キャリア意識として人間関係や職務挑戦を重視し，労働条件を軽視した職業選択をしようとすることなどが明らかにされた。また，専攻学問に対する価値が総合的に高いと，学業への満足度も高く，大学へのコミットメントも高くなることなどが示された。さらに，専攻学問に対する価値の下位側面の高さの組み合わせにより，キャリア意識や大学生活充実度との関連の仕方が異なることなどについて考察がなされた。

第 4 章では，研究 5 として，学士課程におけるキャリア教育が専攻学問に対する価値に及ぼす影響について，キャリア教育前後の縦断データに基づき検討した。キャリア教育として専攻学問とキャリアの関連を考えさせる講義を取りあげ，講義の前後および 3 ヶ月後に専攻学問に対する価値を測定したところ，授業後に興味価値，利用価値，私的獲得価値が上昇するが，利用価値，私的獲得価値は 3 ヶ月後までは維持されないことなどが明らかになった。また，研究 6 では，4 年間の学士課程における専攻学問に対する価値の推移を縦断データに基づき検討した。興味価値は 1 年次が最も高く，3 年次および卒業時には低下すること，利用価値は入学時が最も高く，3 年次で低下するものの，卒業時には再度上昇することなどが明らかになった。こうした結果

論文審査の結果の要旨

に基づき，学士課程における教育のあり方などにも踏み込んだ考察がなされた。

第５章では，総括的討論として，本論文の意義と展望，限界と今後の課題が考察された。特に，第２章から第４章までの結果を専攻学問に対する価値という観点から俯瞰することで，専攻学問に対する価値がもつ特徴を整理した。

2. 論文の意義と独創性

本論文の「専攻学問に対する価値」は，これまで検討されてきたことがない概念であるが，この概念に着目することは，本来の大学教育の主眼は専攻する学問への学びにあるべきで，学生がそれに対してどのような態度をもっているかを捉えるといった非常に実際的な課題に取り組んでいるという点で意義深いと思われる。さらに，本論文では，専攻学問に対する価値と各種の学習成果との関連を検討しているが，専攻学問の学びを通してどのような学習成果を身につけているのかといった観点は，学習成果の可視化が強く求められている大学および大学教育に対する知見の提供にもつながると考えられる。大学の内部質保証に関する課題に学術的な研究として取り組み，科学的根拠を蓄積しようとすることは，独創性があるとも言えよう。

その一方で，教育心理学の分野では学習動機づけ研究が盛んに行われており，その一環として課題価値に関する研究も多く行われている。本論文は，専攻学問に対する価値という学士課程における新たな課題価値に着目しており，一連の課題価値研究に新たな知見を提供しているという点では，学術的な意義も十分であると思われる。

3. 論文に対する評価

第２章から第４章で取りあげている要因間の関係は第１章で図示されているものの，本論文の章の構成を説明するにとどまっていた。申請者も総括的討論で限界点として挙げているが，本論文では要因間の因果関係などを検証する十分な分析はできていない。容易ではないと思われるが，本論文内で取りあげた要因に留まらず，学士課程における専攻学問に対する価値を中心とした多様な要因間の相関関係や因果関係を組み込んだモデルを提案することができれば，本論文の学術的な位置づけや，今後の研究の展望などがより明確になったと思われる。また，専攻学問に対する価値は学習動機づけ研究の一環に位置づけられると思われるが，その議論が多少不足していたと言わざるを得ない。

一方，課題遂行型テストの採用，大規模データや縦断データの収集など，適切な方法でデータ収集が行われており，またデータの特徴に則した適切な分析が行われていた。そして，本論文で明らかになった知見は，高等教育に関する教育心理学的研究に一定の貢献を行う点で有意義であると認められる。さらに，論文の独創性の項でも述べたとおり，大学教育の主眼である専攻する学問への学びに対する学生の態度を捉え，学習成果との関連を検討した本論文の試みは，大学の内部質保証に関する課題に学術

様式 Ｄ－２

論文審査の結果の要旨

的かつ科学的に挑んだ点は高く評価されるものである。

4. 総合的評価

以上の観点から総合的に評価して，本学位審査委員会は，本論文が博士（心理学）の学位を授与するに値するものであると評価した。

38 字×35 行